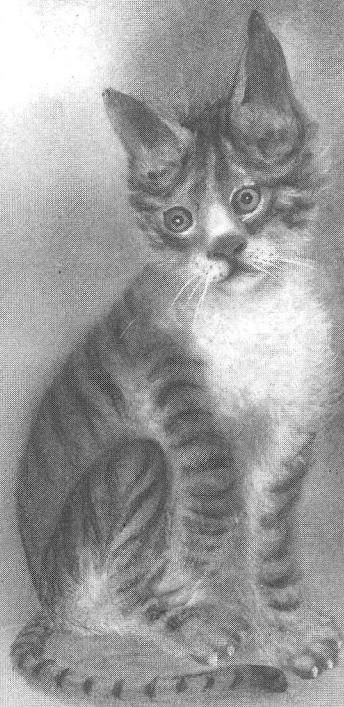


季刊 連句 第27号

平成元年十二月一日発行



季刊連句 第27号 目次

奈良茶三石六斗（南柏雜記 25）…………… 1  
 旅三章（つづき）Ⅱ 写実 Ⅲ 残酷な春 ……草間時彦… 2  
 「鳶の羽も」の巻 鑑賞（Ⅵ）……………東 明雅… 4  
 第六回 武翁賞発表（平成元年度）…………… 8

第九回 俳諧芭蕉忌 第三十一回 猫蓑会 …………… 11

正式俳諧興行 脇起り二十韻 初しぐれ 中川 哲 捌  
 二十韻八巻

捌 市野沢弘子・上月淳子・雑賀 遊・下鉢清子  
 瀧川雅代・速水昌子・東 明雅・本屋良子  
 文 下坂元子・若尾よしえ

「蓑虫」付勝練習二十韻…………… 16

沙羅の会 歌仙四巻…………… 18

捌 東 明雅・上月淳子・副島久美子・原田千町

江戸東京自由大学…………… 22

江戸俳諧早わかり・連句クイズ百点満点… 東 明雅

口用心 お客倦かすな 句を貰え…………… 式田和子

新庄市全国連句大会記……………内田麻子… 28

雁帛往来…………… 29

新刊紹介…………… 28

# 奈良茶三石六斗

南 柏 雜 記 25

雅

A・C・C（朝日カルチャー・センター）で、「一座の法」について話した時、次の芭蕉の壁書と言われるものが取り上げられた。

一 席にして壁によりかかり眠るべからず

一人の煙草をのむべからず

一 わが門の人は奈良茶三石六斗くはざるうちは俳諧上手になるべからず

一 無分別の場に句作あることを知るべし

流石に芭蕉の教えらしく俳諧の座を教えるに、具体的に平易で親しみやすく、俳味があつて、聞いている人たちの間に自然に笑いがおこつたのも当然である。ただ、この奈良茶三石六斗については、さまざま意見が出た。奈良茶は奈良茶飯、茶飯の中に大豆を炒つたものが混じつていて、香ばしくておいしかったと言う人も居り、まずくて困つたと、いかにもまずそうな顔をして、思わず皆が失笑するよゝな場面もあつておもしろかつた。後日、式田和子さんから、「嬉遊笑覧」のコピーが届き、「芭蕉は神様のような感じがしますが、けっこう流行のものなど知っていて、お説教に取り入れていることなどが分かり、面白く思いまし

た」と言つてこられた。奈良茶店が江戸で流行したのがちよつど芭蕉の頃だつたのである。

だが、芭蕉はそんな茶店に行つて銭を出して奈良茶飯を食つたのではなく、かねがね、自分の庵でよく茶飯を喰べていたのではなかつたらうか。私はそう思う。そもそも三石六斗の茶飯を食べるには何年かかることだらう。杉内徒司さんの説では、人間が一年にたべる米の量はほぼ一石だそうである。しかし、これは普通の人が普通にたべる時の話で、俳諧師が茶飯で食べる時は、凡そ常人の半分位と見るべきではなからうか。そうなると、三石六斗は平人ではぼ三年半、俳諧師などの世捨人なら、七、八年はかかる分量であらう。

私の師匠根津芦丈先生はいつも、「連句は十卷まいて一稽古、百卷まいて明るみに出る」と言つておられた。それも何年かかるか、換算してみたことはないけれども、十卷まくには、初心のころなら一年はたつぷりかかることだらうし、百卷となれば、それからスピードは上がったにしても、ほぼ七、八年はかかるだらう。やはり、この位は最低の年月が必要ではあるまいか。近頃はスピード時代、速成栽培の時代だといふので、十巻どころか、二三巻まけばすぐすべてが分かつたよゝな顔をする人が多いけれども、連句も味噌と同じで、じっくり熟成してこそ、よい味が出るというものである。

# 旅三章 (つづき)

草間時彦

## II 写実

マドリッドで、もっとも感動したのはプラド美術館だった。半日かけて観て、その翌日、もう一度、観に行った。

そして、もう一度見たいと思ったが、その時間がなかった。中心をなすものはグレコ、ベラスケス、ゴヤの写実の絵である。グレコが十六世紀後半、ベラスケスが十七世紀、そして、ゴヤが十八世紀である。

「あまりにも真実過ぎる」

「私は真実と現実がこれほどまでに一枚の絵に表現されたのを未だかつて見たことがない。私は自分の顔がこれほど醜かったことを知らなかった。また、この残酷で露わな醜さを私の前に敢て示し得る人間がいるとは知らなかった。」

この有名な言葉はベラスケスの肖像画「教皇イノチエンチオ一〇世」を前にした教皇自身の言葉である。この絵はプラドにはないが、ベラスケスの傑作が多く並ぶ室に、私は佇ちつくした。又、ゴヤの「マドリッドの一八〇八年五月三日・平和の王子の山における銃殺」からも強い印象を受けるばかりだった。

私を感じたことは、日本人には写実を追求するという性格がないということだった。よいとか悪いとか言うことで

はない。日本の絵画には写実追求の精神も手法もない。文学においてもそうである。それは何故なのであろうか。風土の問題か、それとも宗教の違いか、それとも国民性か、判らない。俳句の立場から言えば、写実が存在しないところへ、正岡子規が写生を持ち込んだことも興味深い問題だと思ふ。

私はスペインの夜、ホテルのバーでシェリーを飲みながら、しきりに考えた。流石にスペインのシェリーはうまかった。

写生ということの子規に教えたのは海外留学から戻った画家たちだった。当時のフランスの美術は写実一途から印象派に転じようとしていた。だから、彼らが学んだ写生はデッサンであり、絵画のテクニクとしての写生なのだと思ふ。少くとも、写生が絵画の本質ではなかった筈である。子規は絵画の手法から、写生を俳句に、短歌に取入れようと試みた。それが、いつの間にか、写生が俳句の本質のように言われるのはどうしたことだろう。俳句の歴史、日本の詩歌の歴史で、写生ということは存在しなかった。その存在しなかったものが、本質となるということは、どうしても奇異である。

しかし、俳句で写生が大切なことはよく判っている。連

句の場合もそうである。今の連句人は写生が下手である。例えば恋の句で、女性の姿を眼前の実存在のごとくに浮かび上らせるのが写生の手法である。写生がないと、連句が観念的になるのだ。

それにしても、同じ子規の提唱した写生文があえなく消えてしまったのはどういうことであろうか。

私の今回の旅行は旅行会社のツアーである。団員達はフラーメンコを見物に夜の巷に出掛けてしまつて、ホテルに残っているのは私達夫婦だけである。家人は疲れたと言つて寝てしまった。シェリーのお替りをして又考えた。「あまりにも真実すぎる」ような写真は日本には存在しなかったのである。明治以前においても、西欧文化が入つて来てからでもある。むしろ、そういうことに日本芸術の特色があると思ふべきではないだろうか。シェリーの酔が生んだ結論だった。部屋に戻りベッドに入つてから、ふと気付いた。ベラスケスやゴヤのような写実派の国から、どうしてピカソやダリのような絵が生れたのだろう。おかしいと思ううちに睡くなつた。

### III 残酷な春

今度の旅に出掛けるとき、着るものはどんなものを持つて行くかで、頭をなやました。六月の初めである。ある人は「夏服でいいですよ」と言った。ある人は「セーターは必ず持っていって下さい。冷えこむ日があります」と教えてくれた。行つてみたら、どちらも正しかった。朝と夕方

は冬を思わせるような冷たい風が吹いた。夜はコートが欲しくて、上着の襟を立てることもあった。昼は暑かった。アメリカ人らしい旅行者はショートパンツにTシャツで陽気に騒いでいた。

マドリッドで在留の長い友人に尋ねたら、彼はこう言つた。「一日の間に冬の気候と、夏の気候が交錯するのが春です」この言葉は印象深かった。長閑、うららかな、日永などで私達が知っている春は存在しないのである。冬が去つて、夏が来るまでの二、三ヶ月の春を私達はたのしんでいる。「行春」や「春惜む」はそのたのしさから生れた季語である。しかし、ここにはそういう春はないのだ。

このごろの日本の建築ではウォーキングクローゼットと言つて、歩いて入れる広い洋服庫を作ることが流行している。つまり、日本の主婦が、そこに春夏秋冬の衣類を吊つて置けば、冬と夏の入替えをしなくて済むということなのである。これは要するに主婦の不精である。しかし、一日の間に冬と夏が交錯する国では、夏服の隣りに毛皮のコートを吊して置かないと、ものの役に立たない。赤道に近い国では、「ここには四季はありません。雨季と乾季があるだけです」という。今年の十二月、私はフランスと西独に行かなければならない。このあたりは本格的な冬の筈である。欧州の本格的な冬がどんなものかたのしみにしている。海外の旅はたのしい。遠くから日本を見るといふことは、いろいろ考えさせられることが多くて、決して無意味の旅ではない。旅行メモからの拙文。お役に立てば幸いである。

# 「鶯の羽も」の巻 鑑賞 (VI)

東 明 雅

18

苔ながら花に並ぶる手水鉢

ひとり直し今朝の腹たち

(雑。人情自)

去来

(現代語訳) 苔の生えた手水鉢を花陰に並べたりして、庭いじりをしていっているうちに、今朝からの腹立ちもひとりでおさまってしまった。

(付心) 其人の付。前句の人物の心理状態を描いたもの。  
(付味) 前句に見られる満足感が、付句の立腹解消というところと響き合っている。

(転じ) 打越の清雅な叙景の句に対して、これはやや滑稽味をおびた人情の句である。これで上品だった気分を変化させている。

(補説) この句はずばりと人情の機微をうがち、適切であり、ユーモアがあり、万人の共感を得るところであろう。重厚な性格の持主といわれる去来に、この一面があったとおもしろい。

ここでも異時分の打越が行なわれている。臘夜と今朝であるが、3と5にも朝と宵の打越があった。念のため注意しておく。

以上で裏十二句が終った。この裏は、墨絵をかきなぐる孤高な人物に始まり、手水鉢に花を並べて、ひとり腹立のおさまる人物に終わっている。この首と尾との間の十句も、めりやすの足袋の履き心地をめ、何事も無言がよいと考え、水前寺海苔の吸物を愛で、盧同が下男の動静に関心をもち、その間に、芙蓉の花や、月の臘夜の色どりを添え、午の目ふく里とか、したたるい寝真座を干す景とか、三里あまりの道を行く用事とか、俗なものが少しは混っているけれども、大筋においては、静寂・閑雅を愛する隠遁的気分が流れていることを否定できない。この流れがいわゆる猿蓑調の根幹をなすものである。だから、一見してすこし単調のように見えるけれども、よく読めば読むほど、芭蕉をはじめ、一座の連衆が細かな神経を使って、付味・転じに微妙な色彩と変化を付けていることを知って、感嘆

せざるを得ないところが多い。

また表六句を序の段とすれば、裏の十二句は破の一段である。表六句で禁ぜられていた神祇・釈教・恋・無常・懷旧・述懐、その他、地名・人名など一齐に解禁になるが、ここであまりあばれすぎると、破の二段である名残の表十二句で息切れがして、一卷全体が盛り上らない。その点から見ても、この巻の裏十二句はほどの自由と変化を味わせてくれ、まさに歌仙の手法といふべきであろう。

19

ひとり直し今朝の腹だち

いちどきに二日の物も喰て置ま

凡兆

(雑。人情自)

(現代語訳) 朝からの不機嫌もいつの間にか直ってしまつて、けろりと忘れ、気がむくと二日分の食物を一度に食つてしまふ。

(付心) 其人の付。前句の人の習性について述べている。  
(付味) 前句にあるおかしみのうつり。

(転じ) このところ、浮世ばなれした老境の人物が続いたので、男盛りの元氣旺盛な大食漢を出し、また、滑稽の気分を出した。

(補説)

「いちどきに」は同時に、一度に、一時を重箱読みしたもの。

「二日の物」は二日分の食料。当時の扶持米は男一日玄

米五合、女一日玄米三合が規準であった。精米すればずつと減るが、それでも、相当な分量であり、若い者でなければ食べられぬところであろう。古注の言うように、車力・日傭・飛脚の類、大方は独身者の我俣な生活と見るべきであらう。

また、「食て置」と読まないで、「食て置」と読むべきだという説がある。古版本には振仮名が付いていないので迷うのである。浪本沢一氏は「芭蕉七部集連句鑑賞」において、「置き」では軽く俗にくだけすぎ「置く」の方がよいとされるが、私はやはり「置き」と読む方がよいと思う。それはこの件について阿部正美氏も「芭蕉連句抄」第八篇で言っておられる通り、この句の前後に韻字留(名詞・代名詞などで留めるもの)が多く、変化をはかる為には、連用形を使つた方がよいというのと、さらに私はこの句の軽さがあって、次の史邦の句が対照的にどっしりして生きて来ると考えるからである。

この付合の解釈にはなお、いろいろ異説がある。居候など平素三度の飯も十分に食べていない者が二日分の食事をして機嫌が直つたと、逆付に見るという説があるが、そのように前句、付句を原因・結果として解するのはおかしいし、また、逆付ということについては、この巻、発句・脇の付合の時すでに説明した通り、逆付という語そのものが問題である。

古注を見ると、この主人公を、あるいは任侠のやからと見、あるいは養子掣を尻に敷いた我俣女と説くなど、実に

さまざまであるが、「芙蓉の花のちるよりこゝに至て八句、人倫と居所のみの変化にして、格別のものをいたさずといへども、毎句転じ、句意あらたにして見るにうまず。蕉門の付会たつとぶべき所なり。近来辺鄙の誹士、蕉門と称するものも、其語のひろからざるをおそれ、句ごとに城市村落或は山川草木あるひは人物禽獣ひまなくいたして、変化をもとむれども、地位おなじ所にあるに似て見るにたへず。初心の人、古今上手の集を見て深く工夫を用ふべし」という、「猿蓑四歌仙解」の鈴木荆山の言は、まことに肯綮にあたるものであり、至言であると思う。

20

いちどきに二日の物も喰て置

雪げにさむき島の北風

史邦

(冬。雪げ。人情無)

(現代語訳) 雪もよいの寒い北風が島に吹き荒れる。このような時には二日分の食事を一度に食うようなひどい事態もあるのだ。

(付心) 前句を不自由な生活をする人と見て、その会釈に孤島を出した。其場の付。また天相の付。

(付味) 前句の異常な気分が、付句にひびいてる。響の付。

(転じ) 打越・前句のユーモラスな気分が、この句によって、凄絶・悲壮なものに一転している。この転じは実に見事である。

(補説) 「雪げ」は、雪が降り出しそうな空模様。「雪け」と澄んでよむ方がよいという説もあるが根拠に乏しい。

古注には「北かげの山陰、万不自由なる島の趣、かゝる所には必勇者も生出るためし多し」(「猿談義」)、「驍勇なる流され人など見たらん(「俳諧古集之弁」)、「追風ヲ待得タル船人ト為テ、百里ノリト心掛テ飯ヲ食トシタリ」(「秘注俳諧七部集」)など、また、近代以後の注釈書にも、似たような意見を見るが、この句はもっと切実な北海の孤島で、糧食の輸送もままならず、不自由な生活を送る人の苦しみを描いたものと見なければならぬ。一度に二日の物を食うというのは、打越と付けた場合は当人の気紛れからであったが、この付句の場合は、そうせざるを得ない絶体絶命の窮地に立たされたことなのである。同じ「猿蓑」の「市中は」の巻に、

能登の七尾の冬は住うき

魚の骨しはぶる迄の老を見て

と通うものがあり、交通・輸送が便利になった現代では考えられない、悲惨な生活が偲ばれるのである。

21

雪げにさむき島の北風

火ともしに暮れば登る峰の寺

去来

(雑。人情目)

(現代語訳) 雪もよいの北風に寒い島の冬であるが、そのような時も日が暮れると、峰の寺に灯をともしに登るの



である。

(付心) 起情。面影付(補説参照)。

(付味) 暗い山道をひとりたどって行く心細さと寂しさが、前句の荒涼たる気分によく合っている。移りと見てよ

い。  
(転じ) 同じ前句を挿みながら、打越は異常な生活の物々しさを描き、付句は寂しい孤独の気分転じている。同じ人情目の句であるが、その境涯・気分が全く変わっている

るので、停滞感がない。  
(補説) 「押よふてねては又たつかり枕 火とぼしにくるればのぼるみねの寺 ケ様の句ども、たれぞの面影に立申候句にて御ざ候。尤、他流にもケ様の句ども御座候へども、何の心もなく仕たると、心をよせて仕たると、付肌各別の意味出申候」(「浪化宛去来書簡」)、右の文章は去来が、元禄七年(一六九四)五月、越中井波の浪化上人に宛てて記した俳論書簡の一節である。これによれば、「火ともしに……」の句は、誰か歴史上の人物の面影として付けられたものということができる。面影とは歴史上の故事や古歌などを使って付る場合、それとはっきり表面に出さず、おぼるげに表現して、しかも読者にはすぐそれと感

じさせるような付け方をいう。この句については、前句から佐渡または隠岐などが連想され、承久乱(一二二一)によってここに流された順徳院または後鳥羽院などの悲しい運命(「増鏡」)が思いおこされる。去来は、おそらく、それらの史実を脳裏におきながら、この句を作ったのである。

この巻には、名残の裏三句目「押合て寝ては又立つかりまくら」があり、これも面影の付とされている。その他にも、面影付ではないかと思われる句が一二あって、この面影付が多いというのも、この巻の特色の一つである。

さらに言えば、既に説明した裏の九句目、「この春も盧同が男居なりにて」にも、文学史上、有名な人物が登場する。しかしながら、この句の場合にはっきりと盧同という個有名詞がかかげられているので面影付とは言わない。面影付ははっきりその人の名前が挙げられていないので、読者は自分の知識を総合して推測する。そこにまたおもしろみがあり、深みもある。さきほどの去来の手紙の一端に、「すべて面影の句には、落涙可仕句ども多く御ざ候」と言っている。去来がいかに強い感情を移入して作句し、また句を味わっていたかを物語るものである。

三版

## 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

東京堂出版

定価三五〇〇円。

第六回 武翁賞発表（平成元年度）

歌仙 秋 暑 し

大 窪 瑞 枝 捌

坂 本 孝 子 ・ 山 口 みづゑ  
中 川 哲 ・ 下 坂 元 子  
仏 淵 健 悟

賞状 副賞 金五万円

佳作 歌仙 恥多き日

文音

八 木 聖 子  
矢 崎 藍

応募作品数 歌仙 十三卷

二十韻 一卷

選考委員

東 明 雅  
草 間 時 彦  
杉 内 徒 司

歌仙 秋 暑 し

大 窪 瑞 枝 捌

マンションを曲がりマンション秋暑し

月待つほどに渡る初風

濃りんどう今をさかりと摘むならむ

ピアノの稽古母もつききり

刷り上げし案内状の香りたつ

汗の作業衣さっぱりと脱ぎ

灯揺れ人溢れをりビヤホール

髪緒き娘の軽きステップ

はじめての唇づけ何故か哀しかり

福祉奉仕で留年となる

消費税貰ひませんと張り紙し

馴れし狸の遊ぶ背戸裏

水垢離の禪も凍る坊の月

アマチュア写真カメラ斜めに

試作車の秘密きびしき黒テント

街の烏の追へどきりなく

一身に花浴び明日もかく生きむ

ちりめんじゃこをまぶすおにぎり

瑞 枝

元 子

孝 子

みづゑ

健 悟

哲

ゑ

元

孝

悟

哲

元

孝

哲

悟

孝

ゑ

哲

古代裂商ふ店の春火桶

また起こりさうひどい喘息

NTTプッシュホン式勧めに来

向ふ三軒みんな知らない

夕立雲忽ち隠す八ヶ岳

むんむん匂ふシェイブローション

たまさかに逢へば狂ほしひとの妻

あつけらかんと風俗令嬢

円札を入れて故国へ文つづる

塩煎餅の洒落た包装

アトリエのキャンバス濡らす月の光

瘦かまきりの斧に驚き

うそ寒の肩くぐまする老神父

厨仕事は鼻歌も出て

ひもすがら陶土搗く音村中に

つくしの萌ゆる寺子屋の跡

花爛漫練習船は総帆す

望遠鏡を磨くのどけさ

平成元年八月二十一日

於 マンション白金台

元

ゑ

悟

ゑ

元

孝

同

哲

孝

哲

悟

元

ゑ

悟

元

悟

枝

ゑ

## 選後に

### 草間時彦

どの作品もこじんまりとよくまとまっていた。しかし、力が無く、詩のひらめきも乏しかった。

一句一句の付け方はしっかりしているのだが、三十六句全体の流れがぎくしゃくとしていて、一向に盛り上がりがない。捌が連衆に遠慮しているのではないだろうか。とにかく、捌がもう少し、しっかりしていてくれないと困る。

この賞は年度賞であり、新人賞的性格もある。従って、作品に未来性を感じさせるものが欲しかった。その点では愛知から応募の諸作の鮮度がよかった。

個々の作品についての評価は遠慮したい。連句のたのしさは製作過程にあるのだと思う。だが、賞の選考では、そのたのしさは判らない。原稿用紙に書かれた作品を見て賞を決めるといことが、果して、連句の本質と矛盾しないのか、どうか。そのあたり、いささかの疑いを持っている。

(終)

### 東 明雅

本年度の武翁賞応募作品は、歌仙が十三巻と割合に多かったのに対して、二十韻は僅か一卷であった。これは日ごろ二十韻に力を入れていた私としてはショックであった。原因がどこにあるか検討中であるが、来年度は振って応募していただきたい。

歌仙は全巻が水準以上の作品で、選ぶのに苦労したが、その中で、「秋暑し」はベテランに新人を交え、それぞれの持味を生かして、一卷に生気が漲っていた。この巻と最後まで競った「初燕」の巻も大体同じようなメンバーの作品だったが、付味と修辞に問題があり、残念であった。佳作となった「恥多き日」は文音、大きな傷がないので、奨励の意もかねて取り上げられた。折角の二十韻「秋風」は連衆九名という大人数では、形の上からも落ちついた作品を望むことは不可能であろう。

武翁賞は今回で六回目となった。当初の目的であった新人の養成も一応めどがついたと思うので、このまま存続するか否か、検討するつもりである。

### 杉内徒司

武翁賞選考は楽しい。三井武夫氏から連句の手解きをうけた二十余年前の初心時代を思い出させて頂ける機会だからだ。

しかし、十四作品でも選考というものはむずかしいと毎回思う。蕪村の「行春や撰者を恨む哥のぬし」が沁みじみ思っておこされる。

この二、三年小林秀雄の短いものをよみ返して気持を整えることにしている。今度「戦時中に書かれた「西行」「実朝」「平家物語」に纏って予選に当った。

予選作業は家で一日を費やす。選考方針は年来の主張通り、文音ものは採らず、首尾の作品を残すこと。

各グループ中の佳作を残し、式目等を勘案して次の四篇を選んだ。

中島啓世朔の二作品からは「炎昼」  
「猫糞会関係では「秋暑し」「初燕」  
ころも俳諧衆七作品からは「虚空」  
戸谷是公捌「夏深し」は残さず

さて、選考会議で右の四篇を強く推し、別項のような結果となったが、満足している。



平成元年十月十八日  
於 深川芭蕉記念館

市野沢弘子 捌

上月淳子 捌

雑賀 遊 捌

鞍壺に小坊主乗るや大根引

残る蝗にじやれてゐる猫

正式の俳諧準備整ひて

栗のおこはをふっくらと蒸し

浮かれ出し天狗の面の鼻に月

嬬自慢の演歌さはやか

デニグしてホストクラブの水が合ふ

外車の窓に送るウイंक

吹く風に供華ゆれてをり地藏尊

便追ちちと鳴ける草むら

愚直をばむしる誇りに夏衣

第一線で癌を切る友

ベイ・ブリッジはさむ応援洲あげて

腰まで長きブロンズを抱く

凍月に後妻打ちの炎燃え

柱にみかく北山の杉

出稼ぎの棟梁駅に見送りにて

開店祝配る風船

歪みつつ花片舞ひぬかげるふに

紅しじみ蝶遊ぶ鉢植

翁

弘子

よしえ

孝子

利子

知佐

孝

同

佐

え

利

孝

え

利

孝

え

利

孝

弘

佐

鞍壺に小坊主乗るや大根引

数かぞへつつ眺む初鶴

クッキーをあつき紅茶にとりそへて

夜なべ仕事の手さばきを褒め

細き月傾きかかる山の端に

旅の浮気を買ふ秋袂

短かめのスカートについ目がいって

自画像ずっといい男なり

泥酔の果に水欲る午前四時

エレベーターの故障したビル

つるされて鱸ひらひらと金魚玉

天瓜粉の子逃げ廻る月

MアンドAに抵抗コロンビア

婚約祝ふ教会の鐘

年の差も気にせず頬を寄せ合ひし

入歯はづして眼鏡をとって

夕闇の渚ころがる虚せ貝

遍路笠脱ぎ岩にもたれる

道成寺二上りになり花吹雪

ふと置かれたる摘草の籠

翁

淳子

哲

八重子

光

淳

哲

重

光

哲

重

淳

哲

重

淳

哲

重

淳

哲

重

鞍壺に小坊主乗るや大根引

雑木林を渡る風

能面を収めし扉開かれて

挨拶交す遠来の客

月上る駅前広場車待つ

洒落た蔓籠マロングラッセ

「尼寺へ行きやれ」などと文化祭

噂のふたり肩を寄せ合ひ

迷ひ犬探す商売ビラを貼り

電子レンジにまかす燗番

単身の巴里暮しの画家老いて

捨舟ありぬ睡蓮の池

月の夜の人魚となりし洗ひ髪

恋に震へて眠る少年

抽出しの奥に古びし熱き文

減塩食で食欲も無く

消費税いつのまにやら慣されし

裏の山から鶯の声

駐在所花吹雪して巡査留守

やすらひ祭連立ちて行く

翁

遊

千町

久美子

麻子

達子

町

美

麻

町

美

麻

町

達

美

町

美

麻

遊

達

下鉢清子 捌

瀧川雅代 捌

速水昌子 捌

鞍壺に小坊主乗るや大根引

綿虫白く遊ぶ山畑

町内に配るコビーの仕上りて

舶来煙草ちよっと一服

講釈の席まばらなり窓に月

夜寒の肌をひしと寄せ合ひ

行く秋の自販機で買ふお茶の数

ハンガリー政策右に傾く

百キロの柔道師範痛風で

獣医になつく老耄の狒狒

篠をつくやうな夕立枡の酒

迅雷のあと月の涼しく

念入りに粧ひデートかけもちし

男謀りしことの悔恨

故郷の川清やかに魚の影

鳥集まる分校の屋根

中世の有職文様人語り

茶を淹れかへて勤む豆炒

バス触れて花の盛りを散らしゆく

オカリナを吹く春風のち

翁

清子

好敏

えい

和子

光代

和

清

和

代

和

敏

代

和

代

清

敏

清

代

敏

鞍壺に小坊主乗るや大根引

枯蟪蛄と睨み合ふ犬

丹精の藍ふつふつとたちそめて

久々にきくヴィオラガンバ

ぼっかりと月が浮きあがるピルの上

妙法の火を肩組みてみし

龍膽の薄様に書く密かごと

のまぬ葉が袋いっぱい

パ・リーグは勝率厘でせめぎあひ

パパは今夜もB・Lタクシー

江戸風鈴かすかに鳴りて月渡る

鮎の洗膾に海鮮の酢の物

置酒は部下に空けられるたりけり

ひとも無げなるキスは誰が影

テベレ川ローマ娘は恋上手

孔子は水を嘆きたまひき

年経りて遊び心も身に添ひぬ

たまの甘えにさめる春眠

花便り鬼無里の郷の糸桜

うららの空にゆるるき鳶の輪

翁

雅代

元子

啓世

房利

子

利

利

子

世

利

世

子

世

子

利

利

代

利

世

鞍壺に小坊主乗るや大根引

藪巻したる柿のふたもと

新装の茶室に主客集ひきて

うすくしたてし吸物の味

望の月ベイブリッジにかかりたり

秋の祭りで浜っ子に惚れ

溜息と熱き眼差し扇置く

伯爵夫人オペラグラスを

ばったりと鉢合せする呼び込み屋

ぐらりとゆるる地震に飛び出し

翡翠が魚をねらふ湧水池

でんでん虫のつけし銀色

熟年の女盛りをいかにせん

「やるっきゃない」と後家のふんばり

天網は恢々にして月冴ゆる

引きしおみくじ大凶の凶

さまざま銘柄の酒呑みつくし

畑焼く煙低く流るる

三井の鐘湖渡りくる花夕べ

春雪眺む比良の峯々

翁

昌子

杉亭

ふみ

満子

同

亭

昌

亭

み

満

み

昌

亭

昌

亭

み

満

昌

亭

東 明雅 捌

本屋良子 捌

座見の役

下坂元子

鞍壺に小坊主乗るや大根引  
残る蝗のひそみふる徑

このごろは宅地造成やみくもに

ウエッジウッドのティカップ出し

月の出を待ちてギターを爪弾かん

肌寒ければ背によりそふ

黒き服胸に真珠の露つらね

エリーを唄ふ毫碌の人

壁を越え難民の群ぞくぞくと

鶩の翼浮かんで消え

水中花音なく開く街あかり

月の祭のちよっと一杯

森下の伊勢喜の爺の赤ら顔

マグニチュード6の激震

親分の女と知らでどうしよう

薔薇の刺青ちらと内股

巡礼が居つきて堂に外廁

春一番が山の町吹く

鬼瓦花のひらひら夢模様

鶯笛にわらんべの息

翁 明雅 鈴子 凡 恭子 朋子 龜 奈 朋 鈴 龜 奈 朋 龜

鞍壺に小坊主乗るや大根引  
ふはふはと飛ぶ原の綿虫

掛軸の頼まれし賛思案して

汽笛の響く玻璃戸開けたり

暗ひも寝入りばななり月の宿

サルトル読めと夜学子の彼

ペディキュアの脚に触るればぬのこづちり

逃げしお猿にばったりと会ふ

古びたる玩具に傷の残りぬて

殿下は未だ河川図を描く

献上の酒たいせつに氷室守

宵宮飾る弓張の月

振り向けば視線を逸らす銀ながし

ぬしのためなら左棲とる

シナリオにイチャモンつけしディレクター

シスコの地震で株価心配

一億を出して養老院に入る

ふらここ揺れてぼろり黒鮎

からくりの人形の舞ふ花日和

初鶯に耳をすましぬ

翁 良子 隆秀 健悟 志げ子 秀 悟 同 り 同 り 同 り 秀 同 秀 秀 秀 秀 良 良 げ

第九回俳諧芭蕉忌はよく晴れた晩秋の陽  
ざしの中、恒例の深川芭蕉記念館で行われ  
た。

考えてみると正式俳諧として芭蕉忌が興

行されたのが昭和六十一年の第六回目、私

の猫養歴もこの時が最初である。而も今回

は思いがけず座見を仰せつかったの出席で

あるから、四回目の柴の戸をくぐるのも何

となく緊張する。足に故障のある身を、明

雅先生がお心を配って下さり楽な役を割り

ふって下さったのだが、生来気のきかぬぼ

んやりで、まことに到らぬことばかりでは

あったけれど、今迄とは又違った目で真剣

に式の進行に没入することが出来た。昨年

に続き今年も執筆は女性、式田和子さんの

お役とあれば一層興も深い。宗匠のお声に、

すらりと文台を左右の手に立上った和子さ

んの引しまった表情、美しい足捌きで紫の

袴が目の前をよぎって行く。古格に則つ

た落着いた挙措、高く張った吟声。又衆目

を集めて紅葉した雪柳の枝に白菊を添える



花司の缺の首、香元の捧げ持つ香炉から漂いたゆたう沈の香、真白な障子に映る秋の日、暫しタイムスリップして何もかも忘れのびとときであった。付句が始まってからは座も和み、面白いハプニングもあって一座に笑いが流れる楽しさ。今回は配硯が三人となり、一度にお三人が立ち重ね硯の重さを感じさせることもなくつかず離れぬ美しい作法で配硯をなさった。私座見の役は席入り前、掟書、席札を確認しあとは坐っているのだから、この様な呑気なことも言えるのだが、それでも終った時はすっかり汗ばみまだまだゆとりを持つにはほど遠いことを感じた。

古き良き日本文学の伝統の、一筋の糸を絶すまいと願って始まった猫養会の正式俳諧興行の大きな意味を考え、連句の世界の奥深さ尽きぬ面白さを思い、作品の詩としての向上を念じた。

恰も翁の奥の細道三百年に当り、私の中で一つの良き点となった今年の時雨忌を大切な記念として行きたい。御指導下さった明雅先生御夫妻、先輩の皆様、裏方としてお手伝い下さった方々に心から御礼を申上げる。

## 配硯の役をお受けして

若尾よしえ

八月半ば、明雅先生のお電話に驚き乍らお受け致しましたものの、さあ大変、着物で皆様の前に立たねばと思えますと、髪はロングでなければおかしい等と気になり、翌日パーマ屋さんにとんで参りましたら「六ヶ月かかりますよ」これで一つ減点。次に我が人生にこのような晴れの舞台が控えているよう等と想像も出来ませんでしたので、自然にとばかり真黒に焼いてしまった顔、これで二つ減点。間に合はぬ事ばかり。

兎に角今年は三人でやるのだそうですので美しい千町様とスラリと素的な利子様が居て下さるので安心、九月十七日、南柏という駅に降りました。お声がかげられ、振り向きますと秋元先生です。和風ストラックスの軽装で、助けの舟！ 一步も迷う事なく光ヶ丘近隣センターまで来る事が出来ました。秋元先生の一寸茶目っ気なお目に合槌を打ちまして、そこそこマーケットへ、私はおむすび二ヶとポカリスエット、秋元先生は奥の肉屋さんで揚げたての肉入りコロケ

を二ヶ買ってきて下さいました。二人でセンターのロビーでそれを一個ずつ頬ばりお腹が温まる頃には気もほぐれ平常心になれまして、さりげない中にもお優しいお心配りが嬉しく感謝申上げた事でございました。いよいよ、二階の広間へ上り浴衣に着替え割稽古、リハーサルです。千町様は中央正面の宗匠、脇宗匠、副宗匠、老長の席へ、利子様は右側貴人と連衆へ、私は左側連衆へ、足は進左退右、起右坐左で、重硯の最初は蓋付で右向こう左手前の処作で差し出し、四席終りました時にはもう利子様が見えません。つまり私が遅すぎました。「合わせる」という事が先ず肝要、又私の場合はお前かがみにならぬようにとの御注意を頂く等、先輩の方々の御助言を頂き乍ら、練習に励みました。

重硯を手には、小さい硯一つ一つを紙やすりを底板に磨る等して坐りをよくしていますと、つくづくと伝統の世界に生きるよるこびがこみあげてき、これまでにして、保ち、育み下さる先生や奥様、又先輩の方々に厚く御礼申し上げます。当日、何とかお役目をつとめさせて頂け身に余る光栄と感謝申し上げて居ります。

# 蓑虫

付勝練習二十韻

東 明雅

投句締切  
1月20日

八句目 回教国は酒も御法度

九句目 バザールに水煙草吸ふ男たち

十句目

治定 すこし疲れて美術館出る

1 法廷闘争生甲斐の夫

2 元値そもそも只も同然

3 アパルトヘイトデモの群衆

4 定年の身のテレビ三昧

5 暗き瞳に黒き頬髯

6 イミテーションの指輪売りつけ

7 旗先立てて観光の客

8 俳句ひねりて季語に苦勞す

9 熱砂の果に沈む太陽

10 シシカバブ焼く煙もうもう

11 しゅっしゅぽっぽと縄電車行く

12 耳にかしましジブシーの楽

13 扉の前にひそむアリババ

14 明日は明日とて風の吹くまま

15 チャドルの奥の黒き瞳よ

16 石の家から訪れし客

和久 良子

正雄

千雪

妙子

文子

達子

謙太郎

淑子

智子

昌子

美和

徹

淳子

雄次郎

美幸

うせい

美鈴

治子

※句から離れて転じをねらうべきだと思う。⑦ガイドさんが小旗をもって先にたち案内して廻るのは、日本の観光客に見られる現象だが、もう、かなり一般化していて、句に新しみが感じられない。⑧は「日本人の観光客が、熱砂の国のバザールをみて歩いています。俳句も下手ながら少々たしなんだりして」と、付心の説明がある。他に自を向いあわせた付けで、このような付け方もおもしろいが、すこしごたついているようだ。⑨は前句に対しての付味はすばらしいが、やはり、人情がないのが残念である。⑩これは人情他の句で、水煙草吸っている男たちの中で焼いているのだろう。シシカバブとは羊肉の串焼きである。前句によく付いているが、回教国とシシカバブが問題である。⑪「水煙草は廻し飲みとするものだそうですので、なわ電車も輪にするのと、この巻まだ子供がありませんでしたので」と付心が説明され、流石に一巻の進行に注意しての付けとなっている。ただ、御本人も言っておられる通り、このままではいささか薄人情である。⑫回教国・バザール・ジブシーと何か似たような気分のもものが三句続くようである。⑬これも回教国・バザール・アリババと、千夜一夜物語の世界が続いて残念であった。⑭は完全な遺句である。バザールに集う男たちが明日は風まかせののんびりした人生観の上に立っているというのは、まさにびったりであり、その限りではよい付けであるが、やはり人情が薄いようだ。⑮水煙草を吸う男にチャドルをかぶった女性は向付で、恋の呼び出しである。恋は七句目に終ったばかりだからまだ出

17 発掘品とうまくだまされ

18 打てばひびきて年功の秘書

19 アラベスクのみ並ぶ店先

20 帽子を狙ふ鳥憎みぬ

21 考古学者は地下の夢追ふ

道 郎  
鋭太郎  
典 子

あかり  
よしえ

①は前句の男たちに対して、別の人間をもって来てつける向付の手法である。作者も「前句がなんとなく怠け者のような印象がありますので、働きの人間を出してみました」と言っておられる。御尤もで、おもしろいが、法廷闘争が打越の御法度と縁があり、法という字が打越に出るので困った。②バザールの実態を穿った句で、前句との付味は大変よいのであるが、すこし人情が薄いようである。③アパルトヘイトは人種差別で、それを撤廃させる民族運動は、今日の重要な話題の一つである。水煙草を吸っている男たちと、デモに立上る群衆を向付にしたのはよいが、このような政治問題だと、やはり打越にある国家権力のイメージと結びつくのではあるまいか。④この句は作者も言っておられる通り、水煙草をテレビ画面とみての付けである。水煙草だけでなく、前句の景をテレビ、映画、あるいはお芝居の一場面と見て付けるのは、容易でありすぎるため、あまり用いないがよいと思う。⑤これは水煙草の男の会釈の付けである。このような付け方も勿論あるが、この場合は回教国のイメージがここまで尾を引いているようである。⑥いかにもバザールにありそうなことを描き、具体的にのおもしろいが、ちょっと近すぎるようだ。もっと前※

せない。⑯「南の国のイメージから国寶として来日されたムガベ大統領を時事として付けた」よしであるが、「石の家」だけでは読む人に分からないのではなからうか。⑰そして⑱は既に⑥で述べた感想と近いので詳述はさける。アラベスクはアラビヤ模様である。⑱は水煙草吸う男たちと向付に、気働きのある年功の秘書を付けた。これは①の感想にもあったように、怠惰な前句の人物に対し、働きの別人を対付的に出したもので、付味もよく、転じも十分である。⑳には私には理解できなかった。なぜ鳥が帽子を狙うのか、そしてなぜその鳥を憎むのか、作者に一言説明していただければ、すぐ了解できると思うが、このままでは付心不明と言わざるを得ない。あとでもよいから教えていただきたいと思っている。㉑これは一見、エジプトあたりを想像するけれども、考古学者は必ずしもエジプトだけのものではないので、前句にもよく付いているとともに打越の境地からは離れている。よい付けである。

さて、治定した句は、「すこし疲れて」というところが、前句の水煙草の男たちのダルな気分からうつり、また「美術館出る」で回教国の気分から離れ、転じも十分である。さらに数句続いていた屋内の景からも出ることになり、上々の句であるので、この句を採用した。作者の正雄さんは脇句で一度登場しておられ、私としてはなるべく一巡を守りたかったが、これ以上、適切な句はないと思ったので、再びの登場となった。正雄さんの努力に皆見做ってほしい。次は、人情目・場の句どちらでもよく、雑または冬の句。

沙羅の会

歌仙四卷

平成元年九月二十日  
於 京橋区民館

秋麗

東明雅捌

秋麗許されて入る沙羅の会

皆さざめきつ待てる初月

障子貼る家族揃へるうれしさに

アールヌーボー壁のポスター

船のごとハーブ揺らしてハーピスト

白い背広に白靴の人

故郷はもう知らぬ町南風吹く

産卵終へて帰る海亀

サンダースおぢさんいつもにこやかに

信号待つ間ひよんな決心

お話がうまいというのに魅かれたの

神のみぞ知る本当の事

ボーイジャーは振りむきもせず寒の月

蒟蒻を掘る裏の山畑

いつからか使はぬ井戸に蓋をして

郵便局で配る風船

花の下社内野球の勢揃ひ

春の帽子のリボンひらひら

利子

みづゑ

よしえ

瑞枝

遊枝

明雅

ゑ

利遊

枝遊

え

利雅

え

遊枝

同

枝

ゑ

同

枝

<sup>オキ</sup>セントラルパークに遊ぶ栗鼠の群

単身赴任すでに六年

あれこれと飲んでやっぱり純米酒

「万葉弁当」ちよつと薄味

塩の嶺また塩の道信濃路に

恋を裸像に刻む礫山

コンパクトのぞき素早く紅をひき

ハミングバード宙にとまれり

宵の月ざらざらと出る猫目石

咽喉をうるほす宗祇忌の水

生涯も黄落の期を迎へつつ

客とは名のみ皆悪友

<sup>オキ</sup>ポーカーの楯円の卓はマホガニー

貰しめって梅雨も最中に

親ゆづり悩まされる偏頭痛

辞書をひきひき書ける苗札

カラオケの遠くひびきて花見舟

蛇の群がる野辺の道草

遊

雅

利

遊

え

利

遊

枝

ゑ

同

雅

利

枝

遊

ゑ

同

雅

え

# 野分晴

上月淳子 捌

野分晴髪ふかれつつ集ひけり

今日ぞ待たるる十六夜の月

菜黄含む学童の声くぐもりて

自動車いろいろあれは外車よ

高層ビル競へる如く建ち並び

仕事になれし桐の咲く頃

じんべよりによつきり出てゐる膝頭

嫁とり話にどぎまぎとする

物云ひのゆっくりとしていぢらしき

プードル犬の首輪真つ赤に

哲学の道何処までも川に沿ひ

托鉢の僧整然と行く

月登る「ちよか」埋め置く囲炉裏端

輝葉ぬりこめてをり

新体操りぼんとまりと棍棒と

七年先の誘致運動

外人と見振り手振りて花の下

嬰のにぎにぎ笑ふ春興

淳子 一和 麻正 啓清

子 恵子 子 雄子 子 清和 子 麻和 子 世清 子 雄和 子 世麻 子 雄世

幾とせの織乱れたり内裏籬

吸ひもせぬのに煙草買ひ置く

生き恥をかく度政治家箔がつき

飛べぬやんばるくひな飛びたつ

夫ありと知ったはあとのまつりにて

気がつけばゐる年下の母

あっさりと式場キャンセルしてしまひ

円\$レートどこが適當

近頃は誰でも株を買ってをり

発掘隊長髭の先生

杖つきて修那羅峠の月明く

当地名物煎りし新榎

草刈らぬこともよしとや虫すだき

熟睡するは乗り物の中

御土産にビデオテープのつく世です

鮎の巢離れテレビ画面で

たまきはる命の果の花吹雪

復活祭の染卵買ふ

和世清世 一和 麻正 啓清 子 雄和 子 世麻 子 雄世 子 清和 子 麻和 子 世清 子 雄和 子 世麻 子 雄世

# 秋の風

副島久美子 捌

京橋や行き交ふ肩に秋の風

名月を待ち集ふ小座敷

果物盛棚の苦瓜笑み割れて

急ぎ立てられし原稿を書く

幼子の曲乗り上手一輪車

蝉鳴き始む校庭の隅

姫<sup>お</sup>鱒にアイヌ伝承聞くあはれ

金のクルスを肌<sup>は</sup>に掛けをり

やうやくに叶ひし愛の祝されし

空鉄砲に逃げぬ野鴉

網の目をくぐり慣れたる密輸団

地下の酒場でスコッチを舐め

寒き月ビルの林の上に出で

たうたうたらり能初めなり

若者の言葉さっぱり意味不明

私は私猫は猫流

僧に似て僧にはあらず花の旅

畑打の人遠く小さく

久美子

雅代

孝子

彬風

澄子

弘子

澄子

孝子

弘子

代子

同子

孝子

風子

孝子

代子

弘子

風子

澄子

蝶<sup>お</sup>渡る水満々のダムサイト

発破の刻をきざむ短針

鳴り続く「いのちの電話」受けそびれ

家政婦雇ひ励むお仕事

皺かくし子供かくしてモデル業

浮名三千後悔はなし

さみだれに彼の人恋ひし夢恋ひし

パイナップルのちよつと酸っぱく

消費税どこまで見直し効くのやら

定期で通ふ父の病床

雲間より洩るる月影仰ぎ見る

運動会の用意万端

唐<sup>ちやう</sup>黍の網に焼かれる香ばしさ

友に誘はれロス<sup>ロ</sup>の裏街

財をなし名を得て吾は身も軽く

紐付けしままふうせんの飛ぶ

花盛り記念植樹の若木なる

のどかに奏づ銀のフルート

弘

孝

代

孝

代

澄

代

孝

代

孝

澄

風

孝

風

弘

同

美

風



# 江戸東京自由大学

平成元年十月十三・十四日  
二十・二十一日  
於 東京都迎賓館

東京都主催の「江戸東京自由大学」の中、連句は二回にわたって開講された。「江戸俳諧早わかり」は連句とその作り方を作品（連句クイズ百点満点）で教え、「平成連句大茶会」は、半歌仙を興行披露した。

## 江戸俳諧早わかり（講演資料Ⅰ）

東 明 雅

### ☆俳諧 そして歌仙

俳諧とは、元来、おどけ、たわむれを意味する。正式の連歌の余興として行われたが、室町時代後半以後、連歌に対立する文学形態となった。明治以後は連句と呼ばれる。

俳諧は、法則や形式は連歌のそれを援用したが、もともと滑稽を主とするものだけに、去嫌や差合などの法則もずいぶんゆるやかに自由になった。形式も連歌の百韻が準用されたが、芭蕉の時代になると、三十六句の歌仙になった。

### ☆二物衝撃と連句

五七五の十七字を長句、七七の十四字を短句という。連句という文学はこの長句と短句、あるいは短句と長句をぶっつけ合っつてそこに新しい詩情を展開していくものである。そのことは俳句の取り合わせという方法と同じである。

夏草や兵どもが夢のあと

芭蕉

この句は「夏草」というものに「兵どもが夢のあと」というものをぶっつけた、いわゆる二物衝撃によって生まれたものである。俳句が五七五の十七字で二物衝撃を行っているのに対して、連句は長句と短句、あるいは短句と長句、それぞれに異った二物をつき合わせて詩を作っていく。これを「付け」というが、さらに連句は、長句と短句をつき合わせるだけでなく、その短句にまた、別の長句をつき合わせるというやり方で進展していく。これを「転じ」という。

### ☆発句と脇句

連句はひとりで作るのではなく、複数の人による合作である。その作る場には必ずから客と亭主ができる。これが「座の文学」といわれるものであるが、普通、客が挨拶の発句（五七五）を作る。季語と切字が必要である。これに対して亭主は脇の句（七七）を付けるが、これは発句の余意余情を述べ、発句の季節・その時・その場に応じた句を作る。

### ☆第三の転じ

連句の三番目を第三というが、ここは発句・脇を受け転換・変化をはかる所で、格調高く、動きのある句が望まれ



る。その留め方に一定のきまり、「に、て、にて、もなし、らん」などが定められているのも、発句・脇句の流れを受けて、四句目以降に変化をもたらすための措置である。四句目は趣向や作意をこらさず、あっさりした内容ですらりと詠み下すのがよい。

#### ☆月の定座

歌仙三十六句の中には月の句を三つ、花の句を二つ詠むことになっている。その第一番目の月の定座が五句目である。もっとも定座といっても、大体出す場所のめやすとなっているだけで、実際は繰り上げて出してもよいし、繰り下げてもよい。それに対して花の句は、定座以前に出すことは許されるが、繰り下げて定座のあとに出すことはできない約束である。

#### ☆表六句

歌仙三十六句は四つの部分から成り立っている。表(六句)裏(十二句)名残の表(十二句)名残の裏(六句)で、これがそれぞれ、序・破一段・破二段・急となっている。だから序の段の表六句は静かに穏やかに進行するのを旨として、題材でも、たとえば神祇・釈教・恋・無常・地名・人名・述懐・病体などは出さない。捌き(宗匠)はこの辺のところを見定めなくてはならない。

#### ☆裏

裏に入ると、表で禁ぜられたものが解禁になり、これからおもしろくなる。そのなかに恋句を詠むのも連句の楽しみの一つで、一卷に必ず一箇所以上は出すことになっている。

そして恋句は一句で捨てないことにもなっている。それから時事の句なども自由に、雑の句は何句続けてもよい。春秋は三句から五句続け、夏冬は一句から二句、三句までは詠んでよい。

#### ☆花の句

花は一卷の飾りであり、賞美の対象である。だから一座の長老・宗匠など先輩に譲るのがよい。花は桜を指すが、桜といったのでは花の句にはならない。あくまでも花といわねばならない。その外、たとえば梅の花・薔薇の花・菊の花などを詠んだ句は、それぞれの花個有の特性をあらわすもので、一般的な賞美の意がないから正花としては用いられない。

#### ☆輪廻と差合

連句のおもしろさは、前句への付き具合、それと三句目が打越からどのくらい転じて得ているかによる。付けは物付・心付・余情付などいろいろだが、あまりベタ付けはこまるし、離れすぎても駄目である。一卷が変化展開してゆく時、回想・同意が来るのを輪廻といって嫌い、同字・同語・類似表現などが繰り返されるのを忌む。これを差合というのである。

#### ☆挙句と披講

一卷三十六句の最後の句を挙句という。そしてその作品を読み上げ披露するのを披講というが、眼を閉じてしじみ聞き味わう気分は最高である。

連句クイズ百点満点(講演資料Ⅱ)

次のa・b・c・dの四句から最もよいと思うもの一つを選んで下さい。以下、同様に選び、半歌仙を完成させて下さい。

発句

- a 水に浮く朴の広葉に時雨つつ
- b 掃庭のはや濡れそめし時雨かな
- c 時雨るるや唯して通る道化者
- d 墓々の菊に日の射す時雨かな

脇

- a 色さまざまに紫陽花の鞠
- b 根岸の空に初冬の雁
- c 四五人寄りて芭蕉忌をする
- d 雀かくるるさざんかの中

第三

- a 硯箱墨も摺らずに蓋をして
- b つれづれに普請の画図を引かせけり
- c 涼しさは石燈籠の苔むして
- d 湖の舟鳥居のそばにつなぐらん

四句目

- a 巻き返したる釣竿の絲
- b みどりの滴たる阿蘭陀の酒
- c 尾を振り立てて兄弟の犬
- d 砂山崩す風を聞く宵

五句目

- a 浦の月旅人角力見に行きて
- b 月の下漁船揃ひ帰り来て
- c 月の面を走れる雲の薄々と
- d 更けそめし月のいづこの轡虫

六句目

- a 鱸を得たり酒酣に
- b 芝神明の祭はじまる
- c 木の葉髪なり我も汝も
- d 噓落して角力敗けたり

二句目

- a 秋深く女の袷引まとひ
- b 蟪蛄のあたふたとまる物の蔓
- c したたかに酔うて在はする麻叱羅神
- d 真青な空から一つ落し柿

二句目

- a 旅に契りて旅に別るる
- b ひとり酌ませる筈の膳立
- c 地獄見たしと還俗の尼
- d 又酒になる住替の金

三句目

- a 中々にたうべもやらぬ壺の雲丹
- b かなかなに日の暮れ早き溪の宿
- c 留錫もけふを限りの御法談
- d 美しや漣寄せる竹生鳥

四句目

- a 水清浄とかきつばた咲
- b 同じ算の竝ぶ山里
- c 初夕顔を冷し汁の実
- d 時鳥啼きふと目見合はす

五句目

- a 芦刈に細き月ある沢の隅
- b 温泉煙のかかるところに破芭蕉
- c さまざまに茄子を料理の坊泊り
- d 貨車に積む瓜の香曇り誘ふらん

六句目

- a 靄を持ちちるる美濃の山々
- b 灯下に筆をとれば眠たき
- c 雨降り続く土浦の城
- d 遠く眼につく湖の白鳥

七句目

- a 谷汲の御判頂く親子連
- b はやはやと魚の送り荷つくり上げ
- c 織田勢の備へに風の吹添ひて
- d いにしへの緞の綾のなつかしく

八句目

- a 妻の出入もさせぬ虫干
- b 暖簾くぐりて遠き格子戸
- c 灯火澄める草庵の冬
- d 贈位賜はる一門の春

九句目

- a 日を受けてプロペラ光る二三台
- b 奉公の起臥も子は合点して
- c ちらちらと帽子の上へかかる雪
- d 掌で鳴らしてみても足らぬ銭

十句目

- a 美しけれど水引の屑
- b 胃積の菓送る小包
- c 大きな犬の吠える束の間
- d 行李を結んでありし独楽の緒

十一句目

- a 満開の花の中なる領事館
- b 鍬を肩に將軍帰る花の月
- c 蚕糸学校立つ山見ゆる花の月
- d 満汐もあまりひそかな花の月

十二句目

- a 打出の松露珍らしや春
- b 一つ飛びちる夜の蝶々
- c 巳の日道者も絶えし臘夜
- d 生海苔の樽二人で提げる

(注) 右は、増田龍雨氏著「連句作法」(改造社俳句講座第三卷所収)にすこし手を入れさせていだいたものです。解答はこの二十七号のどこかに掲載してありますので、探し出して御参照下さい。

## 口用心 お客倦かすな 句を貰え

### 式田和子

「始め遊ばせ、あとべらんめえ」

私が江戸東京自由大学の平成連句大茶会の進行役をお引き受けしたことを知ったとき、身内全員が私のこの癖を危惧したそうで、さすが身内です。

これは私自身のこと。もうひとつの口の用心は、会場のお客様の中の「発言マニア」「質問マニア」に長々と話されることで、時間内に納めなくてはなりませんから、黙っていて欲しい、けれど、お客様も連衆のひとりと考えれば、口の代りに句を貰いたい。このまったく矛盾している二つをどうしようと思案投首の毎日でした。

会場は茶室。上り口のタタキの椅子席に三十六人。席の廊下をふくめて座敷に同じ位の人がぎっしり入って、実作の卓を囲んで坐る由。私には立って半畳歩いて二畳ほどのスペース。となりますと、作っておいだコンテもお客に丸見えになりますので脇によせ、見栄はって老眼鏡をはずした私は

背水の陣。どう二時間を切り抜けましょうか。二日ずつセットになっているこの会の

第一日は明雅先生のご講演なので、耳は講演、目はお客観察。とんだ会場人間考現学で、ますます「口用心」を痛感したので、私がウルトラ初心(今でも初心ですが)の頃、連句の特別な用語が一番の壁でしたので、そこをなんとかすればと考え、当日は紙とマジックを用意し、正江さんに用語が出るごとに書いて頂き会場に見せました。正江さんお忙しくてごめんなさい。お蔭でこれを見せている間に「次ハ」と考えをまとめられ、会場も納得している様子がよく分かりました。さて、発句。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな 翁  
捌きは明雅先生で脇をつけられます。

月清ければ小酌の酔 明雅  
秋深し絹四丈をとり出して 正江

この第三には、四丈物の反物の話を入れ、客席のおばさま方のニッコリとうなずかれるのを見たとき、この層はOKとホッ。この撒餌はあとで牛乳おばさまの出現となり、思わぬ救いとなりました。

あき箱の中坐りこむ猫 千町  
海凍てて所在なげなる漁師たち 徒司

ひねもす耳にもがり笛鳴る

寺町を通り過ぎたる右の角 正江  
方違へして婚の荷を受け 千町

字がお上手なので書き役にまわられた清子さんのこの句は、お江戸に對するサービスタ十分と見まして、戦前の下町の嫁入り風景など話しましたが、あまり反応がなく、会場には下町ッ子でお商売をしている人のいないことが分りましたが、この説明はウラに入ったという切りとして、二回目も使いました。発句から良い句が続きましたので、連句は俗談平話を使ってもよいということ分って頂くため、次は

金ありて男前なら姑あり 和子

を付けさせて頂き、ジワリと会場のほぐれる手答えがとれました。句が出なくても困り、うますぎる句が出過ぎても困るといふ心配は、猫糞の健悟さんが会場から

コンピューターがすべて解答 健悟  
よかった、よかった。

有機農骨粗鬆症になり果てぬ 徒司  
さすがニッポン高齢者天国、一番近くのおばさま二人が「そよそよ。骨にス(鬆)が入るのよ」と教えてくれれば、あちらから「牛乳がいいのよ」。こちらの徒司さん

が後をむいておばさまと話し込む。

翁の壁書「無分別の場に句作あることを知るべし」を痛感したのであります。

とに角、マイクください!!

野鶴ゑると集ふ子供ら

正江

連句は空間を移動させて前へ進むという場面の移りをよく会場にお見せし、

ソウダ水並んでをりぬ月の卓

千町

忘れられない人が嫂

徒司

漱石の恋じれったいくすぐったい

正江

会場の男性もウーンとこの付け合いの良さにうなずきます。

一直線に飛んで来る蜂

清子

前句のもやもやをあっさり切る好遺句。

千年の花蘇る根尾の谷

明雅

会場で何回も出句される人があって、挙句は何とかしましょうと先生が、場の句を一直されて目の句とし、

種芋を掘る室に春雨

利昭

と治定されたら、「季重なりですが」といわれたのはグサリとききました。「あとで校合します」と先生から助け舟が出て、第一日は打上げることができました。

この例から、会場情報収集の重要性を痛感しつつ、二回目を迎えました。一回目よ

り少し年齢が若いので、お助け牛乳おばさまもないんだ、と自分にいいかかせます。

四句目に、学生風の若い男性が「付ノ」と短冊を振ったときは思わず「ヤッタア」と

Vサインを出してしまつたのは、彼の付に

Vではなく、これをとっかかりにして、出句は出ルと読めたからです。ヤッタアとは

自分にいったのですが、そこが「あとべらんめえ」の「べらんめえ」たるところ。危

ない危ない。

「和子さん一句付けなさいよ」と後から先生。ヤヤヤヤ。ここでは翁が去来の出

句の遅いのをなじられて、「よもすがらいどみたまたうた」話を入れて、じゃあ私

という運びを考えていましたのに。でも、

この話はしました。「こうして時間を稼ぐのです」と会場に断つて、「男前」の句を付けさせて頂きました。句の付け心は

「衝撃の告白でございます」。

この辺りから一巻でいえば山場となり、まったく句の体をなさないものもありました。が、先生はごていねいにお読みになって、ご批評をしてくださり、良い句はお名前を伺い、おほめの言葉が何よりのプレゼントになったと思います。ウラ八句目の徒司さ

んの嫂の句に説明を頂くためマイクを渡し  
ましたら、どういうわけか入江たか子の話  
になり、それでは日が暮れますので、「お  
話し中ですが」とマイクをもぎとり、「も  
う一句恋を」と会場を誘いますと、お客様  
同志が手渡しして句をどんどん送り、短冊  
が足りなくなつて補充し、係りの方が後か  
ら集めて来た句を小窓を叩いて差込んで来  
るといふ、歌舞伎でいえば助六で、「煙管  
の雨が降るわいな」。

ヨッノ 先生ノ 柏屋ノ 大統領ノ  
挙句には

山市見んとてちははのくに

江戸大学で学ぶうららか

と良い句が二句出まして、これは会場の  
挙手でとりました。ちゃんとご当地の句を  
選んだレベルの高さは嬉しいことでした。

江戸大学で学ぶうららか

正江

先生のお気遣い。正江さんの万全の下準備。連衆の皆様のお助け。会場の若いOLさん。一言いつたびにウンウンと応援のエネルギーを送ってくださった知らないおじさま。皆様に支えて頂けて無事二日終えたあとの小酌の酔はこたえられませんでした。本当にありがとうございます。

## 新庄市全国連句大会記

内田 麻子

出発は九月九日上野発八時十六分のやまびこ号。例年のように秋元さんのお世話で一行十五名同じ車輛に席を取れて先ずは安心する。かくして席の暖まるひまもなく先生からの付廻しが始るのも猫連連衆の旅の式目? になりました。

途中枝分れなどして二十韻三巻あれこれ案じて居りますと忽ち福島着の乗換となり、おべんとうを選ぶのも楽しみのひとつです。かくして新庄駅に着きますと、流石は市の記念行事、関係の方々の受付万端整って、あとはもう市の大型車に分乗芭蕉ゆかりの地を案内していただく。

「柳の清水」は翁が炎天を歩いて来て先ず立寄って喉をうるはしたとされる所、手を入れると今も冷たい水が保たれて居りました。次には芭蕉曾良師弟像の建つ翁乗船の地、最上川を見下ろす丘の上で、地元の方々の今朝漬けたと云う小茄子のむらさき滴るばかりの美味をいただき、最上川下りと

なる。幸にして雨なし、水も満々として天然杉の緑の中を下る。船頭さんの訛りのある説明も一昨年と二度目で唄のように聞き冬の見酒の景など惚びながらゆったりとしたひとときでした。

市内に戻り、車に乗換えて保養センター「もがみ」に行く。すぐ近くと思っていたがこれが又なかなかの山の中。時間が詰って大宴会は、始めから民謡の鳴り物入りでにぎやかに、土地の方々の銘酒最上川に皆心地よく酔って、気分も盛り上りそのあとあちこちで、連句が生れた模様、但し私の部屋は明日への英気を養い静かに過しました。

翌朝は雨、山には霧が巻き雷鳴もどろいて居りましたが、出発して市民プラザセンターの句碑の除幕式の頃になると小雨で目出度く除幕される。次はいよいよ本命の明雅先生の御講演「おくの細道と俳諧」長時間の熱心なお話会場も聞き惚れて居たひとときでした。昼食後は歴史センター観覧芭蕉様に関する物、又民具のいろいろとたくさん集められて居りました。その間に会場が整えられ、十三席の連句、幸にと云うのか私は翁の句碑揮毫の渋谷道氏捌の席と

なり「風の香も南に近し最上川」の立句に仙台の若い奥様方、地元北陽社の方々と始は慎重にしかし終りは又脱兎の如くに付句して半歌仙を満尾され流石のお捌に感じ入りました。

この二日間新庄市の関係の方々地元北陽社を中心とした俳諧の方々皆心暖く手厚くおもてなし頂いた事が何よりも御土産となりました。名残惜しく会館を出ると雨後の虹が正面にかかり、しっとりとしたこの町の風情に色を添えて居りました。

又折角参加するのだからと募吟に応募したみづゑ、淳子、麻子の三吟が思いがけなくも優秀賞をいただき重ねて新庄の皆様にも厚く感謝しながら意義ある旅を終りました。

### ☆新刊紹介

「黄山」 各務支考以来の名門を誇る獅子門が、その俳誌「獅子吼」六〇〇号を記念して出版、合同句集の外に俳諧・俳論、そして資料篇にはくわしい獅子門俳諧年表がついており、連句研究家必読の好著。

(平成元年八月一日。編集国島十雨。非売品)

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時  
会場 関口芭蕉庵  
文京区関口二ノ一ノ三  
(電) 九四一―一四五

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時  
会場 光ヶ丘近隣センター  
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時  
会場 新宿住友ビル四十八階  
朝日カルチャーセンター  
(電) 三四四―一九四(代表)

＊猫養会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月第三水曜日)  
会場 松声閣  
文京区新江戸川公園内  
(電) 九四一―九六四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁帛往來

▽八月一日 柏市光ヶ丘近隣センターで、正式俳諧の練習を行なう。

▽八月四日 「花野連句会」作品百巻記念祝賀のため松本市へ行く。筑波大加藤慶二教授と同行。小出きよみさん、水城澄さんらの歓迎をうけ、山辺温泉寿旅館に一泊、歌仙・二十韻を巻く。

▽九月九日 山形県新庄市主催全国連句大会に出席。最上川舟下りに参加、翌日は講演「おくのはそ道と俳諧」

▽九月二十日 「沙羅の会」出席。歌仙一卷を捌く。

▽十月十三日・二十日「江戸東京自由大学」で、「江戸俳諧早わかり」を講義。

▽十月十四日・二十一日「江戸東京自由大学」で「平成連句大茶会」を興行。

▽十月十五日さいたま連句大会、本屋良子さんが募吟第一席で知事賞を受賞された。

▽十月十六日「連句のすゝめ」の作詩・作曲家齋藤吾朗画伯の個展(丸の内画廊)

祝賀式に参加。

▽十月十八日 深川芭蕉記念館で猫養の時雨忌を修し、正式俳諧興行。あと八席に分かれ二十韻を巻く。

▽十月二十二日 東京義仲寺主催の「俳諧時雨忌」に出席。

▽十月二十四日 新宿「きくみ」で草間時彦・杉内徒司の両氏と平成元年度武翁賞選考。

▽クイズ解答 b d a d c d・a b c d d a d b b c d a

季刊「連句」第二十七号

平成元年十二月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方

電話 ○四七二(七五)一一九二

振替口座 東京七―五二二三三

印刷所 (株) 岩田印刷所

▽277 柏市豊住一ノ一ノ二二

電話 ○四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共  
一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁

三 三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 二去 式目 四春八木

## 人名篇

天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 水原秋桜子編 二三〇〇円 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人  
まで二七〇人の古典的かつ伝統的  
な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実  
作の経験を生かした句作にも役立つ

## 水原秋桜子編 二八〇〇円 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代  
表的な俳人五〇五人の代表作一四  
六八句を収め、公平に客観的に鑑  
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

## 大後美保編 二八〇〇円 季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモ  
ック・不快指数などまで収録し、  
春夏秋冬の四季に分類した。気象  
学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

## 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日で  
は意味や表記が難解で正しい解釈  
や鑑賞ができない。本書はそれら  
の季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一〇〇〇円  
国語学会編

国語慣用句大辞典 A5 六八二頁  
白石大二編

国語慣用句辞典 B6 二二〇〇頁  
白石大二編

国語史辞典 B6 二五〇〇頁  
林巨樹他編

日本語 語源辞典 B6 一八〇〇頁  
堀井幸以他編

京都語辞典 B6 一八〇〇頁  
井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇頁  
天沼 東編

隠語辞典 B6 三三〇〇頁  
樺根 実美編

近世上方語辞典 A5 一〇〇〇頁  
前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 三三〇〇頁  
藤井崇哲編

大正新語俗語辞典 B6 三三〇〇頁  
榎島忠夫他編

難訓辞典 B6 三三〇〇頁  
中山善昌編

名乗辞典 B6 二八〇〇頁  
荒木良進編

名数数詞辞典 B6 四五〇〇頁  
森 睦彦編

あいさつ語辞典 B6 一〇〇〇頁  
奥山謙編

新版 ことば遊び辞典 B6 五八〇〇頁  
鈴木三編

類語辞典 B6 二八〇〇頁  
鈴木・広田編

類義語辞典 B6 三三〇〇頁  
徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 四八〇〇頁  
藤原亨・他編

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇頁  
神島 村松編

東京堂出版

101 東京都千代田区神田錦町3-7

電話 03-233-3741~2